

P2-50-8 自殺が最大の妊産婦死亡原因である可能性についての検討

三重大

田中佳世, 田中博明, 村林奈緒, 大里和広, 神元有紀, 池田智明

【目的】本邦の2010-2014年において、自殺・交通事故による妊産婦死亡は、約5%であった。英国では、すべての妊産婦死亡の約30%が自殺であり、日本と解離を認める。自殺による死亡は、必ずしも産婦人科医が関わっていないこともあり、届け出が十分でない可能性がある。自殺による妊産婦死亡の実態について調査することを目的とした。【方法】2013-2014年において、三重県におけるすべての自殺者を調査し、妊娠中、または産褥1年以内に自殺した女性を抽出した。抽出した自殺者をもとに、妊産婦死亡率を算出した。【成績】2年間における総自殺者は、754例で、妊娠中、または産褥1年以内の自殺者は4例(0.5%)であった。同期間の総出生数が28,215で、自殺による妊産婦死亡率は14.1と算出された。基礎疾患に、うつ病1例(25%)、産褥うつ病3例(75%)を認めた。【結論】自殺は、最大の妊産婦死亡原因である可能性が示唆された。また、全例で精神疾患を基礎疾患として有していた。今後、精神科医、地域の保健師などと連携した自殺予防のための対策が望まれる。

23
日
土
一
般
演
題

P2-51-1 妊娠41週以降の分娩方針の検討

順天堂大練馬病院

三輪綾子, 松岡正造, 武内詩織, 安東 瞳, 真壁晶子, 長澤さや, 北川友香梨, 山口舞子, 松田祐子, 村瀬佳子, 杉森弥生, 萩島大貴

【目的】当院での2013年から2015年9月までの総分娩数1680例のうち、妊娠41週以降の予定日超過症例について母体背景、分娩方法について検討した。2004年の内藤らの報告によると41週以降の分娩においては周産期リスクの上昇を伴う。しかしながら現状では41週以降の分娩方針に関しては各施設により異なり、定まった医学的見地は得られていない。【方法】当院において妊娠41週以降の分娩数は179例と10%を占める。単胎低リスク症例を対象とし、これらを後方視的に検討したので報告する。【成績】41週以降の分娩の母体背景の平均は年齢34.1歳、BMI20.9、身長159cmであった。41週以降での自然経膈分娩は97例(54%)であり、帝王切開は49例(27%)、鉗子・吸引分娩は16例(8.9%)であった。自然経膈分娩のうち37例(32%)は初産婦、76例(68%)は経産婦が占めていた。41週以降の帝王切開49例のうち19例(44%)が分娩停止であり、11例(22%)が胎児機能不全、6例(12%)が回旋異常、8例(16%)が絨毛膜羊膜炎、3例(6%)が児頭骨盤不均衡であった。また41週以降で帝王切開に至った例は回旋異常の1例以外は全例初産婦であった。41週以降の分娩中、帝王切開群と経膈分娩群の間で妊娠・分娩回数、Apgar score1/5分値、また児頭周囲径、臍帯血ガスpHには有意差がみられたが、母体の身長、体重、非妊時BMI、また年齢に差は認められなかった。初産婦の41週以降の分娩に限定すると、85例中48例が帝王切開であり56%にも及ぶ。【結論】以上より41週以降の分娩例では、初産婦の場合帝王切開になるリスクが高く、今後いかに初産の帝王切開率を減少させていくかの積極的議論が肝要となる。

P2-51-2 当院における過去9年間の鉗子分娩症例の検討

岡崎市民病院

田口結加里, 榊原克巳, 森田剛文, 阪田由美, 杉田敦子, 渡邊絵里, 斉藤拓也, 西尾沙矢子, 山田玲菜, 石原恒夫, 内田亜津紗

【目的】鉗子分娩は吸引分娩と並び分娩第2期における有効な急速遂娩術であるが、吸引分娩や帝王切開術の増加によりその件数は減少している。近年、鉗子分娩の有効性が見直されているが、手技に習熟した医師の減少も指摘される。地域周産期センターである当院では以前より鉗子分娩を積極的に行ってきた。今回、当院での鉗子分娩症例を後方視的に検討した。【方法】2006年1月から2014年12月までの当院での鉗子分娩症例に対して、鉗子分娩の適応、吸引分娩等の他の分娩方式の併用の有無、施行した医師の経験年数、出血量、裂傷の程度とその予後、次回妊娠の経過、児の損傷の有無とその予後等について調査した。【成績】9年間で経膈分娩は3,962件あり、そのうち鉗子分娩は407件であった。分娩後2時間の平均出血量は550ml、会陰裂傷の程度は2度裂傷が71%と最多で、頸管裂傷も約1%認めた。母体の予後に関しては、分娩後の大腿内側前面の感覚鈍麻と外陰血腫除去手術を1件ずつ認めたが、1か月健診では共に改善していた。鉗子分娩の適応は胎児除脈などの胎児機能不全が58%と最多で、分娩第2期の遷延、停止が24%であった。鉗子分娩の前に65件で吸引分娩、4件で子宮底圧出法が試みられたが、娩出に至らなかった為、鉗子分娩となった。分娩時の児の損傷は眼底出血を6件認めたが、その後のフォローで消失が確認されており、児に障害を認めたものはなかった。次回の分娩を確認できたのは86件で、そのうち65件が正常経膈分娩であった。【結論】分娩第2期での胎児機能不全や分娩遷延での鉗子分娩の有効性は高く、懸念される母児の損傷は予後に大きな影響を及ぼさなかった。鉗子分娩は有効な急速遂娩術であるといえる。